

なつて大根、菜類、人参、ねぎ、なす、冬瓜、南瓜、西瓜、若ごぼう、わけぎ、かぶら、芋類、白瓜の十三品に限り立ち売りが許され、木津難波市場が出来た。この市場へは津守村からも舟で青物を運んだと思われる。これより先、寛政年間には勝間村西端十三間堀川近くに土地の百姓市場が出来、元市といわれた。

灌漑は、いずれも主として井戸水によつたが、一部に池があり皿池もその一つで、現在区役所所在地の西皿池町、東皿池町の地名としてその名残りをとどめている。

### 第三章 商業

商業の上では、全市第一の人口稠密地であり、交通至便である関係から各地区に殷盛な商店街・市場などが発達し、全市での商業的地位は高く、商店数をみても北・南・生野・東・東淀川の五区について第六位を占めている。商業は工業・農業と異なり都心部への集中度合が極めて高いが、中間区の地位からみて当区の繁盛さをよく物語っているものである。

#### 当区の商業概況

いま当区の商業の概況を昭和三九年七月一日現在で実施された商業統計調査の結果を少しく詳細に記述してみると、まず卸売業・小売業を含めた全般的概況としては、当区の商店数は、五、三九三店、常時従業者数一万八、八一三人、年間商品販売額では六七二億四、七七七万円を数えている。この数字は各区比較において商店数は前述の通り二二区中第六位であるが、従業者数は東淀川区について第一〇位、年間商品販売額は阿倍野区について第一位となっている。さらにこれを卸売・小売の別およびそれぞれの業種別にみると、卸売業では本市においては全市の六八・一パーセントに相当する商店が、東・北・南・西の四区と福島・浪速の両区に集中し、常時従業者数では以上六区で全市の

八四・一パーセント、年間商品販売額では実に九五・二パーセントを占めている。その結果当区卸売業商店数五四四店は全市の二・四パーセント、常時従業者数四六三一人は一・二パーセント、年間商

小売業

品販売額四一四億八、三〇〇万円は〇・四パーセントであるが、全市的地位としてはいずれも一〇位ないし一一位である。

しかし小売業の地位は高く、商店数は四、八四九店で、生野・東淀川・北の各区について第四位であり南区より多い数字を示している。また常時従業者数でも第四位であるが、年間商品販売額では第八位とややその地位を減じている。さらにこの小売業を業種別にみると、織物・衣服・身のまわり品小売業としては、商店数では生野区につぐ第二位にある。(販売額第三位) 飲食料品小売業では第七位、自転車・荷車小売業では第四位、家具・建具・什器小売業は第三位、その他の小売業では第四位で、総体に高位にある。さらに飲食店では、この種商業は喰倒れ大阪を代表して圧倒的に南区・北区の両区すなわちナミ・キタが代表しているが、当区はこの両区につき店舗数一、三三六店で第三位である。そして当区の飲食店の内訳としては、食堂二三一店、料理割ぼう店二六五店、西洋料理店二七店、中華料理店三三店、そばうどん店一三八店、すし屋一〇九店、酒場一六六店、バー五二店、キヤバレー等八店、喫茶店一九〇店、その他一一七店を数えている。

これらの店舗数は年々増加の趨勢にあって、昭和二五年の四、一六一店は二九年に五、一二四店、三九年では五、三九三店となり、飲食店でも二五年の五九六は二九年に八五五、三九年には一、三三六と増加し来っている。

一 小売市場

市設市場の沿革

本市における市設小売市場は、生活必需品の市価の標準を示し、かつ需給の円滑を図る目的をもつて大正七年四月境川・天王寺・福島・谷町の四カ所に仮市場を設け、六カ月の予定で試験的に開設したのが最初である。当時第一次世界大戦の影響で諸物価が急騰したが、本市設市場は市民生活の安定のため十分にその機能を發揮し好成績を得たので、ここに永久的施設として継続経営することとなり、当区でもつぎの通り開設をみた。

市場名	所在地	開設年月日	敷地 平方米	延面積 平方米	建築面積 平方米	構造	店舗 数	備考
玉出	玉出本通二丁目	大正八年 一二月	一、五三	一、六三	一、六三	鉄筋コンクリート造平家建	四六	大正一四年四月一日市域拡張により玉出町より引継、昭和二年三月二日現在のものに改築、昭和三年八月二日冷房設備
花園	花園町三四	大正二年 五月六日	八三	七五	七五	木造平家建	三四	大正一四年四月一日市域拡張によりもと今宮町より引継、昭和八年一二月改築、同町三六九番地より移転開場
橘	橘通五丁目一	大正一四年 三月二六日	五三	五三	五三	木造平家瓦葺一部二階建	三四	大正一四年四月一日市域拡張によりもと今宮町より引継

戦後の市設市場

西天下茶屋	新開通三丁目四	昭和十一年二月一日	一、三三	七尺	木造一部鉄筋コンクリート平家一部二階建	三三二
粉浜	粉浜東之町四丁目	昭和四年九月一日	一、五五	六尺	鉄筋二階一部平家建	四〇
鶴見橋	鶴見橋通五丁目	大正十二年三月、四、五	一、二五	八〇	四〇	昭和四年八月一日建築
花園市場		昭和二〇・三・一三罹災焼失	二一・三・一八	公用廃止		
橋市場			二〇・六・一五			
西天下茶屋市場			二〇・六・一五			
市場名	所在地	開設年月日	敷地	構造	建築面積	店舗面積
玉出	玉出本通二丁目	大正八年二月	一、五三	鉄筋平家建	二、二五	七尺
玉出	目二〇					四三

かくて戦後天下茶屋および橋の両市場が再建され、現在ではつぎの三市設市場となった。

しかし市域拡張により大阪市に引継がれた市場は、その分布上全体としての統一を欠いていたため、右の西天下茶屋新設に前後して、鶴見橋市場は昭和十一年一月三〇日公用廃止となり粉浜市場も昭和十一年一月三十一日休場、翌二年五月三十一日公用廃止となった。さらに第二次世界大戦により物資の配給制がしかれ、市場が殆んど休業状態となり、また戦災による被災のため相ついで公用廃止となり、玉出市場のみが残存する結果となった。

天下茶屋	潮路通三丁目	昭和二十四年七月一日	一、三六	木造平家スレート葺一部二階建	八七	三九
橋	梅南通三丁目	昭和二十八年六月二十九日	一、五五	木造平家葺一部二階建	一、三三	四一

私設市場

右の市設のほかに私設市場があるが、区内には現在つぎの七私設市場がある。(西成中央・千成・千本のほかいずれも大阪市小売市場連合会に加盟)なお、今池市場は全市私設市場の最初として知られている。

市場名	所在地	店舗数	創設年月
今池市場	今池町二〇	五一	大正八年
株式会社公認花園市場	花園町二	四三	昭和二十六年三月
株式会社花園市場	花園町三五	四六	昭和二十七年二月
鶴見橋市場	鶴見橋通七丁目一〇	四三	昭和二十四年
北天下茶屋市場	天下茶屋一丁目一〇	三八	昭和六年 昭和三十七年六月移転

聖天市場	天神森二丁目六	一八	昭和二十四年二月
天下茶屋	天下茶屋一丁目三〇	一一	昭和二十三年
西成中央市場	汐路通三丁目一七	七一	
千成市場	梅通一丁目四	五七	
千本市場	千本通四丁目八	四	

### 二 商店会と商店街

#### 商店会

商店会はいわゆる「横の百貨会」で小売業者が一致団結して街路灯の建設や連合売出し、店頭裝飾など行ってもっぱら顧客誘致に努めているが、本区は殊に各地区とも殷盛で、大規模のものも多く昭和四〇年四月現在西成区商店会連盟加盟のものとしてつぎの三四が数えられる。

#### 区内商店会一覽

商店会名	所在地	区	域	会員数	設立年月	備考
玉出本通商店 振興組合	玉出本通二丁目	南海本線玉出駅西側から 国道26号線に至る玉出本 通筋両側及びこつま街道 玉出本通筋から南へ一歩		七一	昭和三年三月	アーチ二基 アーチケード 昭和三〇年完成
玉二商店会	玉出本通二丁目	玉出公設市場西入口前、 玉出本通から北一丁両側		三一	昭和四年五月	アーチケード 昭和三三年六月 完成

玉出東商店会	玉出本通二丁目	玉出公設市場東入口周辺		二四	昭和二年四月	水銀街路灯 昭和三六年五月
玉出北商店会	玉出新町通一・二丁目 玉出本通二丁目	玉出公設市場北入口周辺		三五	昭和三年七月	アーチケード 昭和三五年
飛田本通 南商店会	山王町三・四丁目 今池町	飛田本通のうち山王市場 通から南へ飛田大門通ま で両側		八一	大正九年	アーチケード 昭和三四年一〇 月完成
飛田本通 中央商店会	山王町二・三丁目 今池町	飛田本通のうち天王寺線 踏切から南へ、山王市場 通まで両側		三八		アーチケード 昭和二五年一一 月完成
飛田本通商店会	山王町一丁目 東田町	飛田本通のうち尼崎平野 線から南へ南海天王寺線 踏切まで両側		八五	大正九年	アーチケード 昭和三五年九月 完成
飛田新開筋 商店会	山王町三・四丁目	阿倍野区旭町との境界か ら西へ飛田本通までの両 側		一三三	昭和二年五月	アーチケード 昭和三八年一二 月完成
山王市場通 商店会	山王町三丁目	飛田本通今池市場向いか ら東へ、北門筋まで両側		六三	昭和二年三月	アーチケード 昭和三五年一〇 月完成
北門商店会	山王町三丁目	飛田新地北門から北へ一 丁両側		四一	昭和二年四月	アーチケード 昭和二八年六月 完成
動物園前商店会	山王町一丁目	地下鉄動物園前東出口北 東の一角		一五	昭和二年一月	鈴蘭灯 昭和二五年一〇 月完成
園南商店会	山王町一丁目	尼崎平野線の南海天王寺 線から西へ飛田本通まで 両側		六〇	昭和二年三月	鈴蘭灯 昭和二五年一〇 月完成

山友会商店街	山王町二丁目	尼崎平野線、市大病院の西一角	二二	昭和二六年一〇月	アーケード完成
今池本通商店会	今池町	南海天王寺線踏切から東へ飛田本通までの両側	三八	大正一二年五月	昭和三年五月完成
萩本通商店会	海道町・東萩町	南海本線萩之茶屋駅から東へ阪堺線今池駅までの両側	八六	昭和六年一〇月	ネオンアーチ昭和二八年四月アーケード昭和三七年五月
東萩町商店会	東萩町	萩町公園西側南海本線ガードまでの両側	六九	昭和四年三月	アーケード昭和三七年七月完成
鶴一商店会	鶴見橋通一丁目	鶴見橋通のうち国道26号線から西へ一丁目両側	四三	昭和四年三月	アーケード
鶴二商店会	鶴見橋通二丁目	鶴見橋通二丁目のうち鶴見橋通筋両側	三一	昭和四年三月	アーケード
鶴三商店会	鶴見橋通三丁目	鶴見橋通三丁目のうち鶴見橋通筋両側	五八	昭和四年三月	アーケード
鶴見橋通中央商店会	鶴見橋通四丁目	鶴見橋通四丁目のうち鶴見橋通筋両側	五〇	昭和四年三月	アーケード
鶴五商店会	鶴見橋通五丁目	鶴見橋通五丁目のうち鶴見橋通筋両側	四六	昭和四年三月	アーケード
鶴六商店会	鶴見橋通六丁目	鶴見橋通六丁目のうち鶴見橋通筋両側	四〇	昭和四年三月	アーケード
鶴七商店会	鶴見橋通七丁目	鶴見橋通七丁目のうち鶴見橋通筋両側	五二	昭和四年三月	アーケード
鶴八商店会	鶴見橋通八丁目	鶴見橋通八丁目のうち鶴見橋通筋両側	七〇	昭和二年四月	アーケード
津守商店会	津守町東四丁目	十三間堀鶴見橋から西へ南海汐見橋線までの両側	四九	昭和二年二月	アーケード
花園商店会	花園町	弘治小学校東側道路、津守阿倍野線から南へ一丁目梅南通までの両側	一一三	昭和三年三月	街路灯
海南商業連合会	梅南通一・二・三・四丁目	梅南通筋、国道26号線から西へ四丁目まで両側	一一三	昭和三年三月	街路灯
北天商店会	南神合町、北神合町	元北天市場周辺	一一三	昭和三年四月	街路灯
天下茶屋商店街	天下茶屋一・二丁目	阪堺線北天下茶屋停留所から西へ住吉街道まで両側	四一	昭和二年四月	アーケード
岸里本通商店会	南海通一丁目	南海本線岸里駅西口から西へ国道26号線までの両側	三九	昭和九年七月	水銀街路灯
千本通商店会	千本通三・四・五丁目	千本通筋国道26号線から西へ千本小学校東南角まで両側	一一三	昭和二年八月	水銀街路灯

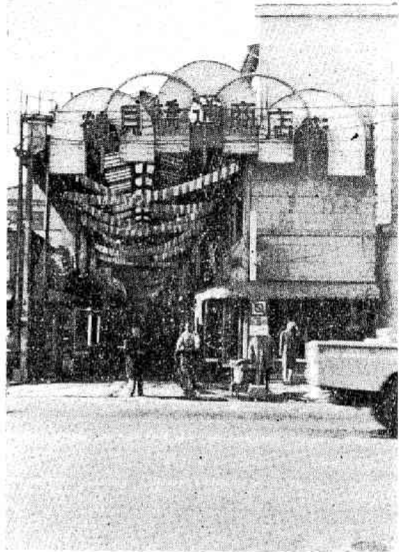
鶴見橋通商店街

西天銀座商店街 汐路通三丁目  
 西天中央通 会 汐路通二丁目  
 西天下茶屋 街 汐路通二・三丁目  
 商店街

柳通筋、南海汐見橋線の西約一丁の両側  
 汐路通市場通筋両側一部  
 汐路通市場通筋のうち柳通筋から南へ二〇〇米の両側

三〇	昭和	アーケード
二一年	三月	昭和三五年四月
四〇	昭和	アーケード
一三年	二月	昭和二年
八〇	昭和	アーケード
二三年	四月	昭和三八年一〇月

右のうち五、六の商店会について沿革をみると、まず鶴見橋商店街は、明治四十二年津守村に撰津紡績工場（のち日本紡績）の工場が生れ、数年後鶴見橋通の中央部に社宅寄宿舎が建てられるに至り、女子工員の新世界への通路として開け来った。かくて大正初期にはおいおいと商店が建ち並び、やっと



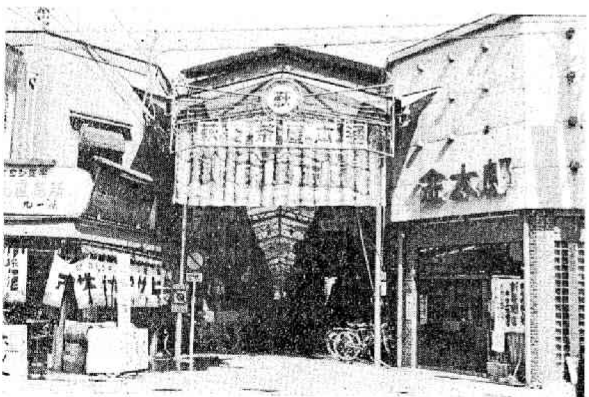
鶴見橋通商店街

大正五、六年頃に商店街の形を示してきた。そして昭和二、三年頃にそれぞれの町毎に単位商店会らしいものが結成されていたが、たまたま昭和四年三月鶴見橋通筋に市バスを通す計画があり、商店街の発展のために反対しようとする気運がもり上り、鶴見橋通総連合会が結成され、各単位会から理事を選び運動の結果、市バス計画は実施に

至らなかった。

当時の会員数は二七〇ないし二八〇名で、この反対運動後も福引付大売出しや誓文払の装飾など合同で実施した。昭和一〇年頃市電ポールを無償で譲り受け八七本の鈴蘭灯をつけたこともあり、当時三丁目目には鶴見館（現在の鶴見日活）、五丁目目に松崎病院（のち藤永田病院と改称）、公設市場、郵便局、七丁目目には高マーケット（昭和六年頃創設）八丁目目に今宮信用組合などがあった。しかし戦災や強制疎開で殆んど寂れたが、その後ヤミ市として急速に復興、衣類・食糧・燃料などあらゆる商品が売買されたが、二二年頃から下火となり、やがて一丁目から皮革関係の商店ができ、漸次靴の街として知られるようになった。なお共同施設としてのアーケードは三年から三七年にかけて一丁目ないし八丁目目に完成した。つぎに飛田本通商店街についてみるとこの通りに店が出来はじめたのは、大正七年ごろからで遊廓の出現とともに日一日、商店街としての形をとってきた。南海電鉄天王寺線が、すでに明治三三年に完成していたので、この街道

飛田本通商店街



萩之茶屋本通商店街

筋も一本線(天王寺線は当初単線であったため、一本線と通称した)を境に南と北にわかれて発展してきた。すなわち大門通駅から北、関西線までの間には、北に共商会、中央に飛田本通会、南には広友会の親睦団体が大正初期から結成されていたが、地下鉄が出来たために北の共商会の三分の一が立退きとなり、飛田本通会と合併した。一方、南にも大正九年頃から北から飛田会、浪華会の二団体があつた。大正の末から、昭和初年にかけて、南北の商店街が飛田本通ようなる連盟を結成して大売出しを行なっていたが昭和十年には飛田本通協同組合となり更に昭和一二年、日華事変が始まるとともに解散した。昭和のはじめ、大売出しなどには街頭にスピーカーを設け、客を集めたがこれは当時でも珍しい試みであつた。

戦時中、物資の欠乏で、配給制度のため衰えたが、戦後、一本線から北は本通商店会として昭和二十年に、南は大門まで浪華会が昭和二二年に再び結成されて、今日の隆盛の基礎となつた。

菽本通商店街  
今池本通商店街  
津守商店会

菽本通商店会は、はじめ昭和六年一〇月菽本通会として発足した。当時は西は国道二六号線から東は阪堺線今池停留場までの大商店街で会員数も一三〇名を数えた。戦災後東側戦災地を除き菽之茶屋本通復興会が組織されて再発足し、二三年菽本通商店会と改称した。つぎに今池本通は当初友恵通と呼ばれていたため、大正一二年五月友恵会として発足したが、昭和一二年に今池本通商店会と改称した。つぎに津守商店会は戦前日紡津守工場を控え市電阪堺線を境に東西に二つの親睦会があつたが、戦災によりその大半が焼失し、戦后二三年東西を合併した津守復興商店会が結成され、二八年に現在

の名となつた。

天下茶屋商店街  
玉出本通商店街

つぎに天下茶屋商店街天友会は当初昭和七年親睦をかねた商店会として商盛会が組織されたが、戦災によって西の方四分の一が焼失、二一年四月現在の天友会として再組織をみた。玉出本通商店街振興組合については、大正初年頃まで現在の商店街の中央両側に松林があり周辺には未だ田畠も多かったが玉出駅ができてのち急速に店も増えた。かくて漸く商店も建ち並んで商店街の形態を整えることとなつた。当時付近にはのち玉出公設市場となつた私設市場と、玉出連合市場(現在の協和銀行付近)の二カ所の市場があつたが、後者は国道二六号線の設置とともに廃止された。そして商店会としては大正一二年頃から、玉出本通の商店中、勝間街道から西に玉盛会、東には玉光会という親睦団体が生まれ、その後昭和三年三月玉出本通会に改組され会員数も八四店の盛大なものとなつた。

西成区商店会連盟

当時玉出本通筋は道路の南側に井路があり、南側の商店の一部ではそれぞれ表に石橋を架け、客はそれを渡って買物する状態であつた。しかし不便のため昭和四年都市計画によって井路を埋め南側店舗の軒切りを行つて現在の四間巾の道路となつた。戦前帝塚山付近の住宅よりの顧客も多く極めて繁栄していたが、戦時中、商店街は被災を免れたものの、付近が大半罹災し客数は一時大いに減じたが、大阪市の復興とともに往年の姿にもどりつつある。なお昭和三九年四月区内最初の商店街振興組合法に基づき商店街を組織した。なお、西成区商店会連盟は、昭和二二年に結成されて以来、各関係機関、団体と連絡協調して、商店の経営合理化、近代化を促進し、会員相互の親睦を図り、商店街の組

組織化発展のため、優良店舗の表彰や会員指導者講習会の開催、優良店員の表彰などの各種事業を行っている。加盟商店会は前述のとおりであり、区内商店会の大半が加盟しているものである。

### 三 卸売市場

玉出青果市場

つぎに卸売市場についてみると、区内には、主として青果物を扱う玉出青果市場（株式会社組織、資本金一五三万円）と食肉を扱う市中央卸売市場食肉市場があり、食肉市場と同地に市立と畜場がある。

玉出青果市場（玉出本通五丁目四三）については取引高も大きくなく、主として住吉・泉州方面の生産地から直接生産者が搬入し、それを区内業者が買取るものである。

食肉市場

食肉市場は、大阪市経済局中央卸売市場の一部門として昭和三十三年一月一三日開設したもので、開設に至るいきさつは、従来枝肉の取引は取引市場が確立せず相対取引によって行なわれていた。大阪市は政府の食肉流通機構改善策の線に沿うべく当市場の開設を計画し、三十二年二月着工、同年一二月完成し、翌三十三年一月一三日から中央卸売市場法に基づく取引業務を開始したもので総工費約二億円であった。

当市場の年間取引実績は、牛約三万頭、豚約九万頭、その他約四千頭で、産地別にみると牛は大阪の七、五〇〇頭が最も多く、徳島五、〇〇〇頭、熊本四、〇〇〇頭などとなり、豚は大阪二万二、〇〇〇頭、香川一万三、〇〇〇頭、兵庫九、〇〇〇頭などとなっている。（数字は昭和三八年一月から二月末までのもの）

月末までのもの）

このように取扱品目は、牛、馬、豚、めん羊および山羊の枝肉並びにそれらの部分肉で、出荷者から販売の委託を受けた枝肉および部分肉を売買参加者に販売するものである。

#### 施設概要

敷地	二万五九五五平方メートル
建築面積	鉄筋一四棟 七〇九五・〇平方メートル
	延 九六四八・九 "
	木造三七棟 三五四七・五 "
	延 三七九〇・七 "
軽量鉄骨一〇棟	七五九・〇 "
延	九八九・〇 "
計	六一棟 一万一四〇二平方メートル
	延 一万四四二八 "
食肉卸売場	鉄筋地上二階 一棟 一一九八 "
冷蔵庫	ユニットクーラー（空冷式）により自動温度調節とし、と畜場——食肉卸売場——冷蔵庫間はモノレールにより搬送している。
地下冷蔵庫	鉄筋地下二階（一〇室）



建築面積 九八〇平方メートル  
 収容可能頭数 牛馬 六五八頭  
 豚 六一四頭

地上冷蔵庫 鉄筋平家建二部中二階(二〇室)  
 建築面積 一五〇九平方メートル  
 収容可能頭数 牛馬 一〇〇〇頭または豚三〇〇〇頭

市立と畜場

なお、同地に市立と畜場があり、これは昭和一四年二月一五日から業務開始したもので、年間と殺数は、牛、七万七、〇〇〇頭、豚、一七万頭、その他、七、〇〇〇頭で、その数は年々増加の傾向にあり、年間と殺総数は昭和三〇年に七万八、〇〇〇頭であったものが三八年には実に二五万六、〇〇〇頭にも達している。

と 室 鉄筋二階建 一八四一平方メートル  
 牛と室 六六〇平方メートル と殺能力 三〇〇頭  
 馬と室 三一〇平方メートル 五〇頭  
 豚と室 七〇九平方メートル 一〇〇〇頭  
 病畜と室 一六二平方メートル

四 金融機関その他

イ 金融機関

区内金融機関 当区は南海沿線にあって特に交通至便であった関係から、町制時代天下茶屋、玉出などに大阪貯蓄銀行の支店設置をみていたが、区勢進展とともに、つぎの如く多くの金融機関を数えるに至った。

名称	所在地	摘要
大和銀行	西萩町四四一三	昭和一三、七、五 野村銀行支店として開設、昭和二三、一〇、一 現名称となる。
萩之茶屋支店		
三和銀行	西萩町四四一	昭和一六、一〇、開設
萩之茶屋支店		
三和銀行	玉出本通二一五五	大正一二年藤田銀行難波支店玉出出張所として開設 昭和八、一 二、九現名称となる。
玉出支店		
協和銀行	南吉田町六	大正一三、四、二三大阪貯蓄銀行天下茶屋支店として開設、昭和二〇、五、一五全国九貯蓄銀行合併し日本貯蓄銀行となり、同天下茶屋支店となる。昭和二三、七、一五協和銀行天下茶屋支店となる。
天下茶屋支店		
協和銀行	玉出本通二一三二	昭和四〇、九、一三新店舗完成
玉出支店		
協和銀行	玉出本通二一三二	大正一二、六、一五玉出駅前大阪貯蓄銀行住吉支店玉出出張所として開設、昭和五、九、一五現在地に移転し、玉出支店に昇格、昭和

三井銀行 柳通二二一六  
天下茶屋支店

和二〇、五、一五、日本貯蓄銀行玉出支店となる。昭和二三、七、一五協和銀行玉出支店と改称

富士銀行 西萩町二一一一  
萩之茶屋支店

昭和一八、三一開設、昭和三六、九、一五新店舗完成

大正九、三、二〇西成郡今宮村花園に(株)百三十銀行難波支店今宮派出所として開設、大正一二、一一、一合同により安田銀行難波支店今宮出張所となる。昭和三、一二、一〇難波支店飛田出張所を併合し現在地に移転、一四、一二、一八萩之茶屋支店に昇格、一六、一一、一七津守特別出張所開設、一九、六、二〇津守特別出張所は特別支店に昇格し分離、一九、八、一昭和銀行合併により同行大阪支店千本通出張所は当店所属となり岸之里出張所と改称、二〇、五、一二岸之里出張所廃止、大阪菜町支店廃止により当店に併合、昭和二三、一〇、一富士銀行萩之茶屋支店となる。

富士銀行 津守町東四一四三  
津守支店

昭和一六、一一、一七津守町四四一番地に安田銀行萩之茶屋支店津守特別出張所として開業、一九、六、二〇特別支店に昇格、二〇、一〇、一〇普通支店となる。二三、一〇、一富士銀行津守支店となる。三〇、六、一三現在地に新店舗落成移転。

協和銀行 西萩町四八  
萩之茶屋支店

昭和二三、六、二三日本貯蓄銀行萩之茶屋支店として開設、昭二三、七、一五現名称となる。

大阪銀行 柳通二二一六  
天下茶屋支店

昭和三六、一一、七開設

神戸銀行 西萩町四八一  
萩之茶屋支店

昭和一一、一二、二七行合併神戸銀行難波支店となる。昭二〇戦争により店舗焼失、同年一〇月西成区梅通一丁目に営業移転、昭和二三、九、一〇萩之茶屋支店と改称。

第一銀行 玉出本通二二二三  
玉出支店

昭和一七、一一、第一銀行心齋橋支店玉出出張所として開設、昭二一、六玉出支店に昇格、昭三一、五、玉出本通筋北側から現在地へ移転

福徳相互銀行 西四条二二三  
花園支店

昭和二八、一二、八、開設、当行阿倍野支店から西成区の大平、住吉区の西半部を引継ぐ。三四、六、一八、玉出支店を分離新設し、西成区南部、住吉区西半部を引継ぎ、難波支店から浪速区南部を引継ぐ。

福徳相互銀行 辰巳通二一四〇  
玉出支店

昭和三四、六、一八花園支店より分離開設

幸福相互銀行 梅通一一一  
花園支店

昭和二九、三、一開設

兵庫相互銀行 東田町八〇

昭和二五、八一開設(株)兵庫無尽大阪南支店、二六、一〇、兵庫相互銀行となり現名称に改称

大阪相互銀行 西皿池町二〇

昭和三四、六、二、桜通二一七に開設昭三七、三、一九、現在地へ新築移転

近畿相互銀行 柳通一一四一

昭和二八、七、一六、西四条二丁目に萩之茶屋支店として開設、三七、一二、六、現在地へ移転し、現名称となる。

大阪厚生信用金庫 柳通二二一六

昭和二九、四、八、当信用金庫第四番目の支店とし開設(柳通四一七)四〇、一〇、二五、現在地へ新築移転

天下茶屋支店 田端通二二三

昭和三八、一二、一、開設(松通二一六)四〇、一一、八、現在地へ新築移転

富士信用金庫 玉出新町通二二二〇

昭和三〇、一〇、一〇開設

永和信用金庫

昭和三〇、一〇、一〇開設

玉出支店

永和信用金庫 山王町四十一  
山王支店  
大阪信用金庫 旭北通四十四  
今宮支店

昭和六、九開設  
大正一三、七、一西成郡今宮町鶴見橋通八丁目開設、昭和二二、  
六鶴見橋通四丁目に移転、昭和三七、七、旭北通四丁目に移転(当  
初大阪信用組合と称し、昭和二六、一〇、二〇より現名称)、昭和二  
三、七、一、大阪信用組合今池支所として開設、二六、一〇、二〇  
大阪信用金庫今池支店となる。

相互信用金庫 西池池町一八  
岸ノ里支店  
豊国信用組合 橋通二十九  
大阪商業信用組合 鶴見橋通四十一  
萩之茶屋支店  
日本貯蓄信用組合 玉出本通二一二二五  
玉出支店

昭和三七、一二、一五開設  
昭和二八、五、四開設  
昭和二八、一二鶴見橋通二丁目四に開設、三九、九現在地に移転

このほか、関西相互銀行玉出支店(辰巳通二一四)明和信用組合(山王町一五)不動産信用組合天下  
茶屋支店(西池池町二二)信用組合大阪商銀花園支店(梅通一一〇)がある。

ロ 各種協同組合

協同組合

また区内の各種協同組合としてはつぎのものがある。

名称	所在地	設立年月日	会員数	備考
大阪府塩販売組合 西成支部	花園町二一五	昭和六・三・三	一二七	昭和一八年二月大阪府塩販売組合創立と同時に西成支部結成
大阪府青果物商業 協同組合西成支部	千本通三十五	二・三・三六	一〇〇	大正一〇年果物商業者により会を結成昭和 一六年大阪市青果物商業組合西成支部を組織 戦後統制撤廃後現在の組合となる。
西成餅生菓子組合	潮路通三十一	二六・一〇	三五	昭和二八年西天下茶屋を中心し西天餅饅頭組合 より西成餅饅頭組合に発展、さらに三三年九 月に再発展
大阪府生菓子協同 組合西成支部	梅南通二一五	二五・二		昭和二五年二月大阪府生菓子協同組合創立と 同時に西成支部結成
大阪府豆腐油揚商 工業協同組合	花園町三〇	一〇・一	四五	昭和一〇年西成豆腐同業組合として発足、商 業組合、統制組合を経て昭和二九年現組合と なる。
大阪南部豆腐蕪蕪 類企業組合	梅南通五一四	二五・三・一	五	大正三年天下茶屋親交会として発足、昭和一 〇年大阪府豆腐油揚商同業組合南支部、昭和 一二年二月大阪南部豆腐小売商同業組合、終 戦後自由営業希望統出し組合員減少
大阪府時計貴金屬 眼鏡商業協同組合	曳船町四八	大正五	八〇	
大阪府紙文具協同 組合西成支部	汐路通三十三	昭和三・一〇・一	五〇	
阪南燃料協同組合	橋通二十九	二四・九・一	三〇	昭和一五年燃料統制に際し西成区燃料小売商

業組合として発足昭和二十四年現在の組織とする。

西成郵便親会 (切手類売捌組合)	西成郵便局内	三〇・一・二四	六〇
西成食堂組合	西今船町三	一五	九〇
西成麻雀同業組合	山王町一―一四	三三・四	五〇
西成遊技業組合	今池町七	六・春	四一
南大阪不動産親和会	山王町二―四八	三・八・七	
西成革新親会	鶴見橋通二―三	二五・四・六	

当初二五年社団法人全日本不動産協会西成区支部として発足、三六年現状に改組

## 第四章 工業

### 一 概 観

当区の工業上の地位

○号工業統計調査の結果からみるとつきのとおりである。

大阪市における当区工業の占める地位を、昭和三七年二月三十一日現在で実施された指定統計第一号工業統計調査の結果からみるとつきのとおりである。

なお、この調査は、通商産業省主管のもとに毎年一月三十一日現在で全国的に実施されている定例センサスで、古くは明治三年九月民部省達によって調査を命じた「物産表」のうちに、農産品のほか塩、油、砂糖、紙、木綿、生糸、織物、漆器、陶磁器、鉄器等約二〇の工業製品が含まれている。明治四二年には農商務省令をもって工業統計報告規則が制定され、従前の他計式調査を改め、工場主からの自計申告制度による工場調査に発展し、その後大正九年からはそれまで五年毎であった調査を毎年の調査に改められている。昭和二三年からは日本標準産業分類による製造業を対象とする工業統計調査となり現在に至っている。(日本標準産業分類の制定は昭和二年であるが、昭和二三・四・五年の調査も同じ範囲の製造業を対象としている。) 現在工業調査は、統計法に基づき工業の実態を明らかにすることを目的として実施されているものである。(通商産業省刊「工業統計五十年のあゆみ」による。)